

また、AB部材の曲げモーメント分布は、

$$M_{ABx} = M_{AB} + S_{AB}x - \frac{P_4}{2}x^2 \quad (\text{A点から } x \text{ の距離の点の曲げモーメント})$$

…………… (式2-3-10)

- b 隔壁に作用する外力は、aにより求める。
 - c 底版は連続版として計算する。
 - d フーチング部は、片持ばりとして計算する。
- 2) その他の形状

突縁のある長方形断面やT形断面の部材の設計については、前壁及び後壁は原則として側壁に支持されている版として設計する。ただし、側壁一つの場合は片持ばり、2つ以上の場合は連続ばりとして設計する。また、側壁は原則として前壁及び後壁の反力及び伝達モーメントに対して両端固定版として設計を行い、側壁の部材長は前壁と後壁との中心間距離とする。

3) 鉄筋

- a 主鉄筋のかぶりは原則として次の値以上とする。

側壁外側	7.0cm	内側	5.0cm
隔 壁	5.0cm		
底版外側	7.0cm	内側	5.0cm
- b 鉄筋の有効高さは、上記aの鉄筋のかぶりを基にして計算する。
- c 配筋方法は使用鉄筋、使用鉄筋径の使用範囲、最小鉄筋間隔と鉄筋間隔を拡げる場合のきざみ数を定める。所要鉄筋量 A_s は式2-3-11から求める。

$$A_s = \frac{M}{\sigma_{sa} \cdot j \cdot d} \quad \text{…………… (式2-3-11)}$$

鉄筋使用量 A_s' は使用鉄筋の直径、鉄筋間隔を定め所要鉄筋量を下回らず、また過大とまらない範囲で決定する。

- d セルラーブロック及び底版の吊鉄筋量は、安全性を考慮し、原則として4点吊り以上で計算する。この場合作用する荷重は短期荷重とし、許容応力は50%の割増を行う。
吊り枠を使用する場合の吊り筋に作用する荷重 P は、

$$P = \frac{W + W' + F}{N} \cdot K$$

直吊りの場合の吊り筋に作用する荷重 P は、

$$P = \frac{W + W' + F}{N \sin \theta_i} \cdot K \quad (\text{吊り筋の応力算定に用いる荷重}) \quad \text{…………… (式2-3-12)}$$

$$\cancel{T} \quad X = \frac{W + W' + F}{N} \cdot K \quad (\text{吊り筋の埋込長算定に用いる荷重}) \quad \text{…………… (式2-3-13)}$$

吊り筋の径

$$D \geq \sqrt{\frac{2P}{\pi \sigma_{sa}}} \quad \text{…………… (式2-3-14)}$$

$$D \geq \sqrt{\frac{2P}{\pi \tau_{sa}}} \quad \text{…………… (式2-3-15)}$$